

1章1～18節の序文の主題は、1節、14節、18節と展開されています。ここで、「言」を「言である方」と置き換えてみるとわかりますように、序文は、創造の始め、あるいは創造に先立って存在した「言」を語っているのではなく、キリスト教の始めに存在した一人の人間、ナザレのイエスのことを語っていると思われます。そして、古代教父以来、14節の「言葉が肉となった」に著者の神学の中心があるとされてきましたが、最近では、このことも必要不可欠ですが、18節が結論であり、イエスを神さまに等しい者として告白することが著者の究極の目的であると考えられています。14節はこの福音書におけるイエスの誕生物語です。著者はマタイやルカ福音書のようにイエスがどこで、どのように生まれたのか、ではなく、イエスの誕生はどのような意味を持った出来事であるかに興味があります。言は肉をとって人間になりました。この出来事を受肉と言います。「肉」という語は肉体をもった人間のことを指しています。「言という方」がナザレのイエスとして歴史の中に現れたのです。神さまでありながら、人間となったのです。「私たちの間に宿られた」とは、直訳すれば「私たちの間に天幕を張った」です。「天幕を張った」という表現の背景には、旧約聖書の臨在の幕屋があると思われます。出エジプト記に記されていますように、神ヤハウェは臨在の幕屋に宿り、その栄光を現し、そこから人々に語りかけ、荒野を行く人々と共にいて、人々をカナンの地へと導きました。「幕屋を張った」とは、神さまが共にいることの印です。そのように、神さまに等しい者、イエスが私たちと共にいるのです。原始教会の伝承や他の福音書では、イエスは「神の子」と記されていますが、この福音書だけがイエスを神さまから遣わされた「独り子」という用語で語られます。これは「ただ一人生まれた者」という意味で、この方の他に神さまから直接生まれ、神さまと栄光を分かち合う子はいないという主張を込めた表現です。18節で、著者は序文を独自の「父のふところにいる独り子である神」という表現を用いて締めくくります。「父のふところにいる独り子である神」とは、地上での総ての業を終えて再び父の元へ帰り、著者が書いている今、父の元にいる復活のキリストのことです。この福音書では、地上のイエスは常に「父の元から来た、父から遣わされた」方として、また「父の元へ帰る」方として語られます。このように序文は、一方でナザレのイエスが人間として、歴史の中に登場するまでを述べていながら、実際には、この登場はもちろんのこと、十字架と復活も含めた総てのイエス・キリストの出来事を既に完了したものとして眺め返す視点から書かれているのです。